

五二

猿著聞集

四

猿著聞集

第一卷惣目錄二卷之四

筆ト云 婦坊主ニ成ニ更

ト表題アレテ本文相見ニ

不申 筆者之落筆ニ

矣又空表書ル者ト相尋

申々所答美リ度ト也

○万守長柄のやとり小舟よむ事

えど石町の大島万守友人とてわがりのびひてまやこ
小舟をり友とちのびひてまやこをりよむ足どく行
万守の哥よむ事と各とてをりよむ古きあともど見
ての道の記とのふの事をまへつるめど友とちのびひてま
まことおあひひのびひてまやこをりよむ万守がまを
あちつけまをりよむとあひひと日長柄の稚子よむの町
まよめりてまやこのふのびひてまやこをりよむのふけ
のあひひとまやこのふのびひてまやこをりよむのふけ
まよめりてまやこのふのびひてまやこをりよむのふけ

まよめりてまやこのふのびひてまやこをりよむのふけ

また又病のまこりけるひひてまやこをりよむのふけ
万守の小柄まよめりてまやこのふのびひてまやこをりよむ
かいつとまよめりてまやこのふのびひてまやこをりよむ
つるまよめりてまやこのふのびひてまやこをりよむ

まよめりてまやこのふのびひてまやこをりよむのふけ
かいつとまよめりてまやこのふのびひてまやこをりよむ
つるまよめりてまやこのふのびひてまやこをりよむ
まよめりてまやこのふのびひてまやこをりよむのふけ
かいつとまよめりてまやこのふのびひてまやこをりよむ
つるまよめりてまやこのふのびひてまやこをりよむ

そこのでまよものふかへるるさう。まよふは衣るかり
なほをまつたてしうてしうやぢふをむる雲のゆめゆめ(陸安)
て山ふちや一野ふちう一まちのちぢめゆるるまよひ人のまよひ
血の皮をひひひてしう入るるかまじしうあつたふかへる
とぞ鳴海のそためて夕立ふちひるるとた
世立寺ふちうやせうせん夕立の雨ふちせする袖ぢゆもは
とこのまらつかの中ふちまらこの道をまよてまよひにのどく
人ゆでまよつちう

○其隣深夜松原ふちとび一車

阿波のふち宮のり^{まほ}の里ふ氏と前田ふぢるを其隣とのふ人

ちう昔のし四

〇七

つひ酒をこのと夜とくくちとびちの死るるまよとまよ
つねぢゆかつちと月ちぢらるる春の宵やとまよまよく夏
のまよちちとまよとまよのまよと雪まよのまよ死冬の夜
まよぢまよまよとまよと行まよとまよとまよの秋月のまよ
まよちまよのまよとまよの夜ふちとまよとまよまよまよまよ
らまよまよのまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
小まよ三十里まよまよまよまよまよまよの原まよまよまよの松
の下まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
まよまよ

里のミちとを夜まごめてこゝろかへつおをむいとをうかりた

○元有心優るる事

ひこちの國江戸寄の小林元有のわづらふことよふ一哥も又
よふよふをうつしおのふ天の下のこゝろ書言のむかきんじ
と日ごと密窓のめとちゆろこゝろ國のめろくく
らたててぬらゆ人のことをのびやうふ心まをうし
まきてめのおかづつぬさぶあてみか人とやううらう
あつ人とあうひまると元有のわづらふことよふ
さてんまづのめづるひまろおその日雨のてふり
やぶて炬の中におあめ一づくめつづを元有秩だてめて

うけてまのうけうとんとおんはまうふとてまのうけあは
ろは板の上おのせとやうてひとづつぬらまはが又秩だ
度うけまのうけ板のうかあへやうとぬら又ぬらまはが
板おのせとぬらまはが又そのまづととたかりあつて五
上まはがまづぬらまはが又そのまづととたかりあつて
十まかりあつたまづぬらまはが又そのまづととたかり
あめぬらまはが今一づつぬらまはが又そのまづととた
まづ友こちをぬらまはがかりてまづぬらまはが又その
めとよのまづぬらまはが又そのまづととたかりあつて

て菊泉きくせんとのみづもあつていづるいむう一酒おるうころ水まう
とて今もけあゆめくおそなはらびもまをころう酒つころてひま
おあぢのひささそころうりくまてそらの人かめてまやいぬ
そのころころのそとてまおのまをさころころのこの水谷
直方なむかたふるまふあつる碑いしのころまをりうの國人こくにん奏そうるふがし書
へ清きよの江え椽えん圃ぼあぞあつる

猿著聞集四後